

K-802

坊主窪1号墳 予備調査報告書

1989.3

山辺町教育委員会
坊主窪古墳群調査団

坊主窪1号墳 予備調査報告書

1989.3

山辺町教育委員会
坊主窪古墳群調査団

序

本報告書は、山辺町教育委員会が実施した「坊主窪1号墳」の調査をまとめたものであります。

今回の調査は、山形盆地の中西部を占め、山辺町大寺地区に所在する坊主窪、壇の山古墳について、地元では古くから知られていたが、まだ本格的な調査は行なわれたことがなく、その間に開墾がすすみ果樹園などに利用され、大方は世に知られることなく姿を消してしまいました。ところが山辺町大寺地区の山林中から前方後円墳らしい古墳を発見し、本古墳が前方後円墳だとすれば奥羽山脈を境とする日本海側において、もっとも北に位置する古墳ということになり、重要な意義をもつわけで、本報告書は貴重な記録となることあります。

また、本報告書が本町の郷土史研究の一助となり、さらには埋蔵文化財に対する一層の理解につながれば幸いに存じます。

最後に、この度の調査にご協力いただいた柏倉亮吉先生、川崎利夫先生をはじめ調査団長の渡辺久内氏、調査員の方々など関係の方に対しまして心から感謝とお礼を申し上げます。

平成元年3月

山辺町教育委員会

教育長 蜂 谷 四 郎

例 言

1. 本報告書は、山形県東村山郡山辺町大字大寺字坊主塗に所在する坊主塗1号墳の予備調査の結果をまとめたものである。
2. 予備調査は、山辺町教育委員会の委託を受けた坊主塗古墳群調査団(団長 渡辺久内)が、昭和61年6月14日から同月23日まで10日間実施した。
3. 調査要項及び調査体制については本文の中に明記した。
4. 本報告書は、調査員の意見にもとづき、川崎利夫調査員が執筆し、挿図は主として茨木光裕調査員が作成に当り、図版・編集は川崎調査員が担当した。
5. 本報告書作成の事務局は下記の通りである。

教育長 蜂谷 四郎
教育次長 高橋 宏英
社会教育係長 砂押陽一郎
同主任 武田啓一郎

6. 本報告書作成にあたっては、山辺町郷土史研究会、広谷長雄氏、高橋玄寿氏より御協力を賜わった。

目 次

1.はじめに	1
2.調査要項	2
3.位置と環境	2
4.これまでの研究	9
5.調査的目的と方法	13
6.調査日誌	15
7.調査の結果	17
(1)周辺の古墳分布	17
(2)1号墳の墳形と規模	18
(3)発掘の所見	19
(4)出土遺物	24
8.まとめと考察	26
9.結言	27

挿図目次

第1図 坊主塗古墳群周辺の遺跡分布図	3
第2図 墳の山古墳出土勾玉・管玉実測図	4
第3図 良実塚附近の現況(写真)	5
第4図 良実塚出土の直刀輪郭図	5
第5図 良実塚出土直刀片(写真)	6
第6図 大塚遺跡出土の土師器(写真)	6
第7図 大塚遺跡出土土師器実測図	7
第8図 坊主塗古墳群の図(「山辺町郷土概史」より抜粋)	11
第9図 坊主塗古墳群位置図	12
第10図 坊主塗1号墳平面図	13
第11図 坊主塗1号墳遺構配置図	14
第12図 調査状況(1)(写真)	15

第13図 調査状況(2) (写真)	16
第14図 坊主窪古墳群古墳分布現況図	17
第15図 Aトレンチ実測図	20
第16図 Bトレンチ実測図	20
第17図 後円部北断面図	21
第18図 C区・D区・くびれ部・前方部実測図	22
第19図 くびれ部断面図	23
第20図 出土遺物(1)	24
第21図 出土遺物(2)	25

図版目次

1. 調査前の坊主窪1号墳(1)北西道路側より	28
2. 調査前の坊主窪1号墳(2)後円部	28
3. 後円部 西側より	29
4. 後円部 北西側より	29
5. 前方部先端	30
6. C区・後円部北側をとりまく周溝	30
7. Aトレンチ・周溝	31
8. Aトレンチ・周溝断面	31
9. C区・くびれ部	32
10. C区・周溝断面	32
11. D区・墳麓部	33
12. D区・後円部からくびれ部へつづく墳麓線	33
13. Gトレンチ・前方部から後円部へ	34
14. 後円部の断面	34

1. はじめに

山形盆地の西を限る白鷹丘陵の縁辺部には点々と古墳群の分布がみられる。南から、^谷_谷古墳群、^谷_谷古墳群、^谷_谷古墳群、大之越古墳、遠見堂古墳群（以上山形市）、^谷_谷古墳群（山辺町）、^谷_谷古墳群（山形市）、そして坊主窪・壇の山古墳群（山辺町）、ややとぎれて高瀬山古墳群（寒河江市）、そして本黒古墳分布の北限をなす河島山・名取古墳群へ続く。

それらの古墳群が存在する下位の段丘地や、白鷹丘陵より流下する小河川によってなり立つ扇状地上には古墳時代の集落跡も多く認められる。

山形盆地の中西部を占め、山辺町大寺地区に所在する坊主窪・壇の山古墳について、地元では古くから知られていたが、まだ本格的な調査は行われたことがなかった。その分布状況や実態があいまいなまま、漠然と後期古墳か終末期群集墳と考えられていた。その間に開墾がすすみ、果樹園などに利用されて大方は世に知られるところなく姿を消してしまった。

ところが、1985年（昭和60）11月、白鷹丘陵の古墳を探索していた茨木光裕は、山辺町大寺地内の山林中から前方後円墳らしい古墳を発見した。通報を受けた加藤稔・秦昭繁・川崎利夫らは、11月23日茨木とともに測量調査を実施した。

これを契機に、新聞紙上やテレビなどにも報じられて、日本海側北限の前方後円墳として注目されるにいたった。これまで山形盆地において前方後円墳として認められるものは上山市金谷に所在する土矢倉2号墳であり、ほかに山形市菅沢1号墳、同七浦孤山古墳群中の1基がその可能性あるものとして考えられていた。したがって本古墳が前方後円墳だとすれば、奥羽山脈を境とする日本海側においてもっとも北に位置する古墳ということになり、重要な意義をもつこととなる。

山辺町教育委員会では、町文化財調査委員会や民間の同好者で組織する山辺郷土史研究会とも協議をかさね、県教育委員会文化課の指導・助言もあって、予算を計上し予備調査を実施することになった。

予備調査は、前方後円墳かどうかを確認することに主体を置き、1986年（昭和61）6月14日から23日まで行われた。調査要項は以下の通りである。

2. 調査要項

坊主窪古墳群第1号墳

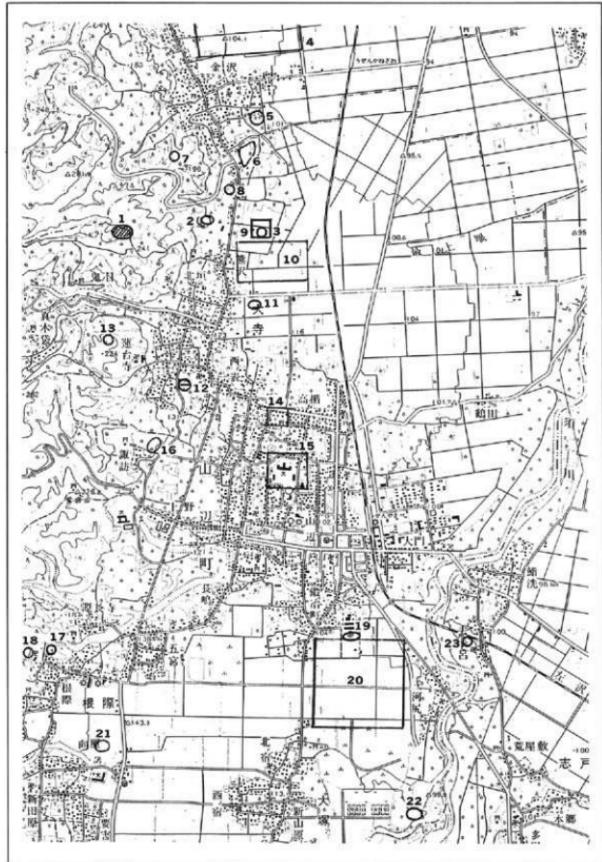
- 所在 山辺町大字大寺940／2、942／2
- 土地所有者 広谷長雄、東海林吉郎
- 調査主体 山辺町教育委員会
- 調査期間 昭和61年6月14日(土)～6月23日(月)
- 調査団
- 団長 渡辺久内
- 調査指導 柏倉亮吉
- 調査員 加藤稔 川崎利夫(担当者) 尾形與典 芙木光裕 後藤禮三 佐藤継雄 工藤一夫
- 調査補助員 久連山進 峯田誠一 多田利明 多田勇 広谷長雄 高橋玄寿 飛塚桂子
- 事務局 山辺町教育委員会 峯田幸男 長岡茂樹 武田啓一郎 相沢恒子
- 調査協力 広谷長雄 東海林吉郎 佐久間比呂子 川口四女子 後藤隆 小松良吉 村山幸一 村山賢二 村山行宏 三浦浩人 佐藤庄一 手原孝 萩地政信

3. 位置と環境

山辺町は、山形盆地の中西部に位置し、須川の西から出羽丘陵白鷹山塊の山地を含む北東から南西へ細長い形をなしている。東と南は山形市、西は西村山郡朝日町、南は南陽市及び西置賜郡白鷹町、北は中山町及び西村山郡大江町に接し、東村山郡に属する。

坊主窪古墳群の所在する大寺地区は、白鷹山塊の東麓にひろがる集落で、町の北部を占める。大寺地区には、南北朝期足利幕府にゆかりがある出羽国安国寺がある。古墳群は、熊沢・北垣の集落の背後の丘陵に位置し、安国寺より北西へ1.5キロ、白鷹丘陵の東縁部を占める。標高250m内外で、麓の熊沢集落の水田面よりの比高120mである。遺跡の地番は、山辺町大字大寺940～942である。(第1図)(第9図)

山辺町の中心部をなす本町から城下町特有の鍵形の道を北に進むと大寺地区に達するが、そこから玉虫沼をへて朝日町宮宿にいたる山越えの舗装された道路があり、そこを西に向うと鬼の目という集落がある。北側へ山地にむかってやや急な農道を上り、さらに右折してしばらく進むと視界がひらけた平坦な場所に達する。ここからは山形盆地を一望に眺めることができる。このあたりを坊主窪といふ。附近は果樹園として戦後に開発されたが、なだらかな起伏があり、台地縁辺部より急傾斜になって山麓に達する。この平坦地の西側



第1図 坊主窪古墳群周辺の遺跡分布図 (2500分の1)

第1表 周辺の主要遺跡地名表

No.	遺跡番号	遺 跡 名	時 期	No.	遺跡番号	遺 跡 名	時 期
1	351	坊主屋古墳群	古 墳	13	349	安国寺經塚	平 安
2	350	壇の山古墳群	古 墳	14	346	高樹城跡	中 世
3	354	良実塚	古 墳	15	345	山野辺城跡	中世～近世
4	405	柳沢条里	平 安	16	348	諏訪原	平安～中世
5	404	前 田	平 安	17	388	根原の場	龜 文
6	355	新 鶴	平 安	18	389	普光寺境内経塚	近 世
7	403	庚 甲山	弥 生	19	395	一本杉	奈 良
8	352	西光寺山館跡	中 世	20	394	山辺南部条里	奈良～平安
9	356	新館(船跡)	中 世	21	391	原	龜 文
10	356	山辺北部条里	奈良～平安	22	393	大 墓	古 墳
11	353	塙 田	奈良～平安	23	127	去手路古墳群	古 墳
12	349	遺台寺	弥 生				

(注) 1. No.は第1図分布図に対応する。

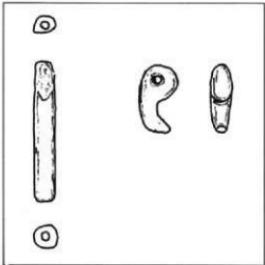
2. 遺跡番号は「山形県埋蔵文化財包蔵地一覧」(1978-県教委)の一連番号である。

の小高い場所に1号墳が所在する。附近は雜木林による山林である。(第1図)

坊主屋古墳群については、後程詳しく述べることにして、その近くに所在するところの関連する遺跡について以下暫見してみよう。

ここから約500m東、山地への傾斜軒換線上標高150mとの台地上にかつて「壇の山古墳群」があった。(第1図-2) 数基の円墳から構成される古墳群であるが、明治時代に開墾されて破壊され、跡形を残さない。壇の山から出土した勾玉と管玉をそれぞれ一点広谷長雄氏が保管されている。勾玉は頭部が大きく1.7cmという小型で、淡緑色を呈し硬玉製である。管玉は長さ3.5cm、径4.5mmで暗緑色をなし碧玉製である。これらの遺物は、明かに壇の山に所在した古墳からの出土物である。⁽¹⁾ 石材などがほとんどなかったことからみると木棺直葬と思われるが、勾玉の形や硬玉製品である点などから、終末期などの群集墳ではなく6世紀以前の古墳群であろうと考えられる。(第2図)

さらに平地部に下りて県道平塩山辺線の東側畠地中に「良実塚」と呼ばれる塚があった。(第3図) 1919年(大正8)に左沢線敷設工事の際、その土砂を採るために掘り起され破壊されてしまった。たまたまそこから直刀が出土し、いま



- 4 -

は腐蝕甚だしく小さく折損しているが、熊沢集落の日枝神社に保管されている。現物とともに輪郭を写した実測図も添えられてある。

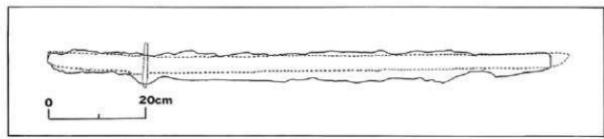
(第4、5図) その箱書きには、次のように記載されている。

「大寺村字熊沢の東方

約十町程離れた処にある新植(地名)には古来良実塚といわれた面積凡そ一畝歩余りの小高い丘があり、明治二十七年頃まで大杉の木が繁っていたが、その後開墾されて畠地となつた。偶々大正八年左沢線敷設の際其持主より工事請負者新庄村出身米山保氏に買取られ切崩された処地下八尺程の層から古刀が発掘され、その古刀が昭和八年頃まで豊田村字金沢の某氏(特に名を秘す)宅に保管せられてあったが、崇りあるを恐れ己が墓地に埋めた。昭和二十八年大寺村村史編さんに当りそれを調査する必要から再び発掘し、同二十九年良実公が承和年間江州坂本の官幣大社日吉神社より勅請しこの地に建立せられたと伝えられる日枝神社に奉納した。長年、土中に埋没されていたため腐蝕甚だしく且つ寸断されていたので原形を復原し見取図を作製して添えることにした。

昭和二十九年九月是を記す

日枝神社氏子惣代」
その経緯については、故武田泰造氏も「山夜話」のなかで述べられている。⁽²⁾ 見取図の柄頭の部分についてはそのまま認めることができないが、木製の鞘が付着している。全長109.3cm、刀身幅4～5cm、柄部長19cmほどであるが、復原不可能なほど寸断されているので不明な点が多い。刀身は平練平造り、闊の形状は斜角片闊である。茎の飼部は直で先細ではない。これまで県内から出土した直刀の中で最大のものは、川西町下小松61号墳より出土した全長105.1cmのものであるが、これをしのぐ長大な鉄刀である。下小松61号墳は、主軸長25.5mの前方後円墳である。⁽³⁾



第4図 良実塚出土の直刀輪郭図(日枝神社保管の図による)

良実塚出土の直刀は、県内最大の鉄刀で、年代も6世紀を下ることはない。良実塚には小野良実の墓という伝承がある。5~6世紀代の前方後円墳であった可能性があるが、現状ではその状況をさぐるのが困難である。



第5図 良実塚出土直刀片

良実塚周辺は、小野氏の

星敷跡と伝えられ、塚は星敷内に築山状をなしていたといわれるが、中世の方形館と思われる。その西の丘陵は西光山といい、空濠があったと伝えられる。良実塚があった新館に関連する館跡であろう。

その北の平地部に新館遺跡があり、県道平塙・山辺線の改良工事にかかるため、1987年8月から10月まで県教育文化課により発掘調査が行われた。その結果竪穴住居跡1、掘立柱建物跡5、倉庫跡2などの他土壙や溝が発掘された。出土した土師器や須恵器などから10世紀代の条里制に関連した集落跡と推定されている。(4)

白鷺丘陵から須川や最上川にむかって流下する小河川の流域は、小肩丘地が連なっているが、山辺町周辺の水田地帯には条里遺構が多く分布している。すなわち、大曾根条里、山辺南条里、山辺北条里、柳沢条里などがある。とくに山辺南条里は、1979年圃場整備に



第6図 大塚遺跡出土の土師器（山辺町教育委員会保管）大小不同

ともない県教育文化課により発掘調査が行われた。全面に洪水などによる砂をかぶつていたので、長地式の坪内割を示す畦畔、水路、水田などが良好な状態で検出され、水の取入れ口附近からは当時の足跡も発見されて話題をよんだ。水田面を切った溝より奈良時代後

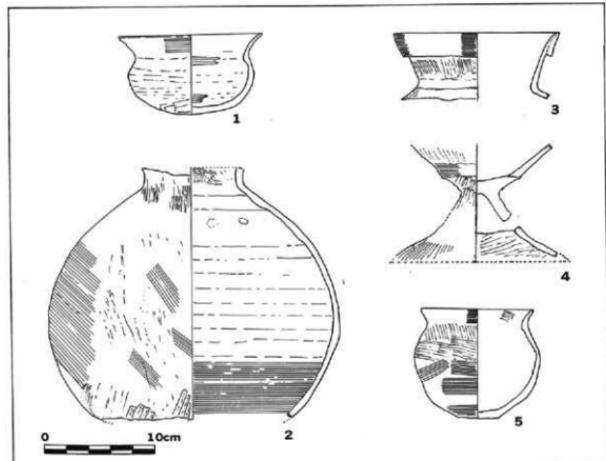
期の国分寺下層式の土師器が出土したことから、本条里は奈良時代以前に成立していることが確認された。(5)

中山町の柳沢条里も1988・89年に県教育文化課によって発掘調査が行われ、旧畦畔や溝跡などが検出されて、平安期の条里遺構であることが判明し、引きつき調査が行われている。(6)

このように山辺町を中心とした須川西岸は古くから水田開発が行われているが、小河川流域の畠状地原頭部台地には、蓮台寺、庚申山などの弥生遺跡がある。

山辺町の南部、須川の段丘には大塚遺跡がある。古墳時代前期の集落跡で、1960年（昭和35）柏倉亮吉・赤堀長一郎氏らによって小发掘が行われ、土師器片と住居跡の一部を下層より検出した。(7) これまでに出土した土器は、高柄玄寿式や教育委員会によって保管されている。複合口縁の壺、高杯、壺があり、4世紀後半の土師器であり、よく古式土師器の特徴をとどめている。（第6図、第7図）

同じく町の南部の根際には、平地をのぞむ丘陵台地に根際古墳群、須川の東岸段丘に去手路古墳群がある。根際古墳群は字南の前・俗称五輪森にあり、明治時代から古墳が掘ら



第7図 大塚遺跡出土土師器実測図（山辺町教育委員会保管）

れていたというが、1933年（昭和8）たまたま箱式石棺が掘り出され、その石材は相模公民館に保管されている。凝灰岩の扁平な石材を組合せた長さ1.66m、幅42.4cm、深さ33.3cmの石棺で、内面には朱が施され、主軸方向は北東より南西を向いていた。人骨が若干あつたらしいが、他の副葬品は見当らなかったという。⁽⁸⁾

去手路古墳群は、山形市志戸字去手路にあり、須川の東岸の段丘に位置する。1939年（昭和14）と1944年（昭和19）の2回にわたりほぼ同じ地点より発見された。いずれも箱式石棺で、1号墳は同地の敬念寺に保存されている。⁽⁹⁾ ところが最近になってたまたま3号墳が掘り出された。1983年8月のことである。箱式石棺内から鉄片や管玉が出土した。

去手路古墳群は水田の地下より箱式石棺が出土しているので、もともと墳丘はあったと思われるが、削平されたために明かではない。根際古墳群も去手路古墳群も7世紀以降に築造された終末期群集墳と推定される。

なお山辺町内では、白鷹丘陵中の北作からも箱式石棺が1基発掘されており、同じく終末期の古墳と考えられる。⁽¹⁰⁾

これらの終末期古墳の先駆をなしたのが、良実塚・壇の山・坊主塚などの古墳群であったと考えられる。

白鷹丘陵より東の山形盆地へむかって流下する小河川や沢のほとりに、最初は小規模な水田が作られ、古墳時代に入るや大塚遺跡にみられるように小扇状地の扇端部に大規模な集落が営まれるようになる。それらを基盤として古墳が出現することになるであろう。

律令体制に入るやさらに水田の開発が進行して、須川西岸の各地に南北から北へと条里遺跡が連続して、山形盆地における農業生産の重要な拠点として多くの集落が営まれた。「和名抄」によれば、この地域は最上郡山辺郷に属していた。そして平安後期には山辺荘が成立したものとみられる。山辺荘の文獻上の初見は、貞治3年8月10日の仁木義長預置状で、南北朝期の1363年であるが、この南に接する大曾根荘などから考えて鎌倉時代には存在していたものと考えられる。その荘域は、南大曾根荘に接し、北は中山町の一部を含み須川の西側の山間部をも包む一帯であった。⁽¹¹⁾ この地域は、平安時代の遺跡も多く、先にふれた新籠遺跡のような平安時代の集落跡の他に、根際に普光寺山経塚、大寺に安国寺裏山経塚など平安時代末期の経塚や外容器を出土した仏教遺跡⁽¹²⁾、玉虫沼古窯跡などの生産遺跡もある。また出羽の足顎寺の瑜伽寺も山辺荘の南か大曾根荘の北にあったといわれ、普光寺や安国寺などは中世以前に遡る寺院である。

安国寺は南北朝期に足利尊氏の発願による寺院で、夢窓疎石の開山と伝えられ、出羽国における北朝勢の大拠点であったと思われる。

このような古代・中世における歴史的展開は、山辺地域における古墳文化の様相と決し

て無縁ではなかったのである。

【註】

- (1)川崎利夫「管玉三例——村山地方における埋滅せる古墳についての覚書」
山形考古1号 1957。
- (2)武田泰造「山夜話」P101 1973。
- (3)川西町教育委員会「山形県川西町下小松墳丘群小森山支群 第61・64号墳調査報告書」
川西町埋蔵文化財調査報告書第10集 1986。
- (4)山形県教育委員会「山辺町新館遺跡調査説明資料」 1987。
- (5)山形県教育委員会「山辺条里遭構発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第22集 1979。
- (6)山形県教育委員会「中山町柳沢条里遺跡第1次調査説明資料」 1983。
- (7)赤堀長一郎「山形県山辺町大塚土師遺跡の報告」 山大史学 別刊号 1964。
- (8)柏倉亮吉「山形県の古墳」 P59 1953。
- (9)柏倉亮吉 前掲書 P58。
- (10)川崎利夫「山形盆地における古墳の成立と展開」 山形考古3ノ2 1979。
- (11)山形県「山形県史第一巻原始・古代・中世編」 P506 1982。
- (12)川崎利夫「山形盆地西部の経塚について」 山形史学研究16 1980。

4. これまでの研究

坊主塚や壇の山古墳群については、地元において古くから知られていたが、研究者の間で注目されることはほとんどなかった。県内の古墳について集大成された「山形県の古墳」（柏倉亮吉著）でもとり上げられなかった。⁽¹⁾ 県内の古墳研究者が現地調査に訪れるようになったのは、1955年（昭和30）頃からである。川崎利夫は坊主塚・壇の山古墳群を踏査して、「山形考古」の創刊号に、広谷氏保管の管玉について資料紹介を行ったことがある。⁽²⁾ さらに川崎は1964年（昭和39年）、山形盆地の古墳分布について述べた折、山辺古墳群を去手路・根際・大寺の三支群にとらえ、本古墳群を大寺支群の一つとして把握した。⁽³⁾ その後、1979年（昭和54）に「山形盆地における古墳の成立と展開」の付表「山形盆地所在古墳一覧表」のなかで、坊主塚古墳群が25基、壇の山古墳群8基による群集墳として記載した。⁽⁴⁾

1963年（昭和38）に山形県教育委員会は、埋蔵文化財の破壊に対処するため全県下にわたり埋蔵文化財包蔵地を調査して「山形県遺跡地名表」を刊行した。⁽⁵⁾ その中に、通し番号614及び617（山辺町番号19及び22）に「坊主塚古墳群」が登載されている。さらに1969

年（昭和44）刊行の「山形県史 考古資料」に地名表の改版が載せられているが、これにも記載されている。⁽⁶⁾

県内遺跡地名表はその後、1978年再調査と再改訂の上、「山形県遺跡地図 付山形県埋蔵文化財包蔵地一覧」として公表され、現在も大方の市町村ではこれをもとに埋蔵文化財への対応をすすめている。⁽⁷⁾もちろんこれには「坊主塚」「壇の山」「良実塚」など記載されており、「坊主塚」に古墳群があることは周知の事実となった。しかしながら本古墳群についての性格や実態・時期についての認識は依然としてあいまいで、漠然として終末期群集墳として把握されていたのである。

故武田泰造氏ははやくからこの古墳群に注目し、地元大寺の出身でもあったので度々調査を実施している。同氏著の「山辺郷土概史」のなかに次のような記述がある。⁽⁸⁾即ち

「……本町内の古墳群を代表するのは大寺の坊主塚古墳群であって、現在の状況は別図の通りである。これは一名四十八森とも呼ばれ、もとは四十八基あったと伝えられている。巷間では、この古墳は自然に崩壊するのは差支えなければ、鶴や鶴で壊せば、その家には必ず祟りがあるといわれてきた。しかし、明治の末期ごろから開墾する人が出てきて壊されていたが、何か不都合がおこったためか、半ば壊したが半ばは保存してあるところや、壊して悪いといわれているのを壊したので気が咎めてか、一坪ばかりの地を残しておいたところもある。曾て（昭和十二年）本町に郷土史研究会が結成されていた時に、この古墳の三基を発掘したことがあった。ところが、何れも出土品ではなく、石室を組立てたと思われる扁平な石片が無秩序に散乱しており、それに間々須恵器の破片が混入しているのを見るにすぎなかった。但し、今後において、要害古墳とともに発掘して調査すべき課題である。」（P27～28）

また次のようにも記されている。

「大寺坊主塚古墳群の中にあって、郷党人が車塚と呼んでいた広谷弥治兵衛氏所有の二基（今は崩壊して畑になっているが、ここを開墾したときに滑石の管玉と勾玉が出土した）や、東海林吉郎氏の所有で雜木林の中心する二基（完全保存）などは、相互に接続している双円墳とみられるものもあるけれども、これは例外として取扱ってよいであろう。」（P25）

そして本地域が畿内の大和政権によって統一されたとして郷土の黎明期としての古墳文化の時代を結んでいる。

これによると、1952年（昭和27）当時、壇の山古墳群は8基あったがすべて破壊され、坊主塚古墳群は22基あったが、（第8図）遺存しているものは6基である。なお武田氏は壇の山古墳群も坊主塚古墳群のなかに包括している。その6基は、坊主塚1号墳を2基とみ

れば現状でも確認できる。東海林氏所有地内の「双円墳」としたのが、1号墳のようである。昭和12年頃発掘した3基より石材片や須恵器片が出土したことを使っているが、なかには箱式石棺もあり、須恵器の出土は後期以降の古墳であったことをうかがわせる。

以上のような経緯をへて、1985年に茨木らの再調査によってふたたび本古墳群が陽の目をみることになったのである。

[註]

(1)柏倉亮吉「山形県の古墳」（山形県文化財調査報告書第四輯） 1953。

(2)川崎利夫 前項註(1)と同じ。

(3)川崎利夫「辺境における古墳文化の特質」（「日本考古学の諸問題」所収） 1964。

(4)川崎利夫 前項註(10)と同じ。

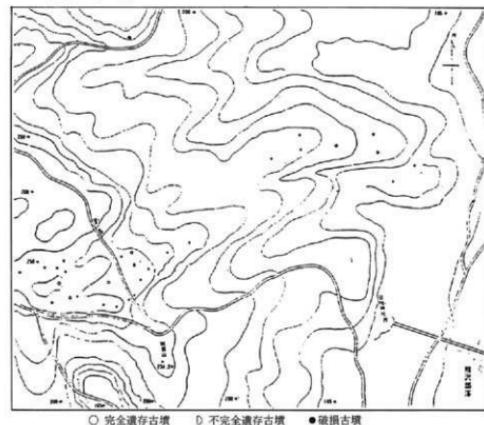
(5)山形県教育委員会「山形県遺跡地名表」 1963。

(6)山形県「山形県史考古資料」（資料編II） 1969。

(7)山形県教育委員会「山形県遺跡地図付山形県埋蔵文化財包蔵地一覧」 1978。

(8)武田泰造「山辺町郷土概史」山辺町 1970。

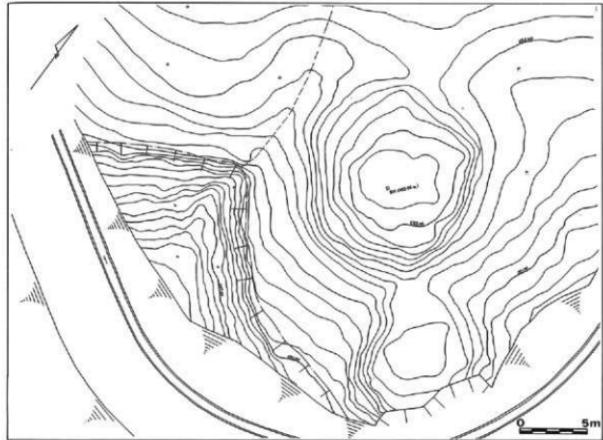
武田氏は「続山辺野話」（1981）のなかの「11・郷土の古墳」においても本古墳群についてふれている。



第8図 坊主塚古墳群の図（「山辺町郷土概史」より抜録）



第9図 坊主塚古墳群位置図



第10図 坊主塚1号墳平面図

5. 調査の目的と方法

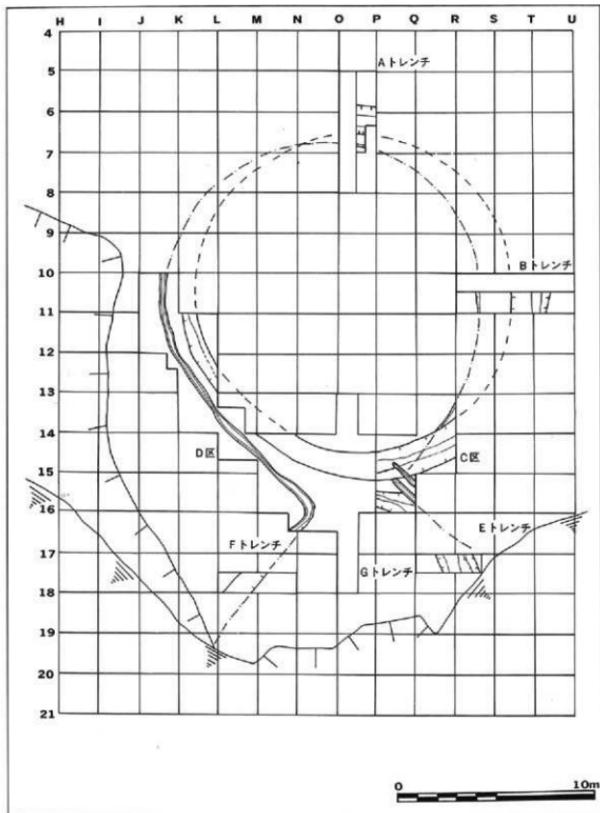
本古墳群についてはじめて学術的調査の歴が入れられることになったが、今回の調査の目的はつぎの通りである。

- (1) 1号墳の墳形や規模を明かにし、前方後円墳かどうかを確認する。
- (2) 1号墳の築造のあらましを解明する。
- (3) 周辺の古墳の残存状況を把握する。

以上の通りであるが、前年11月に測量調査を実施した際に、前方後円墳であることがほぼ確実となった。しかしあだ地表からの観察だけでは不明確な点もあるので、発掘調査によってより確実なデータを得ることを最重点とした。従って内部主体については、今回触れないこととしたのである。

調査にあたっては、後円部墳頂に基準点をもうけ、X軸をアルファベット記号、Y軸を数字で表記した2 mのグリッドを設定し調査をすすめることにした。そして次の7箇所に発掘区を設けた。各発掘区の名称と調査のねらいは次の通りである。(第11図)

Aトレンチ 1×4.5m 後円部南縁の墳麓線と周溝の確認。



第11図 坊主塗I号墳遺構配置図

Bトレンチ $1 \times 6\text{ m}$ 後円部西縁の墳蓋線と周溝の確認。

C区 16m^2 くびれ部が前方部と後円部に接続するかどうかの確認とその屈曲の状況の調査。

D区 26m^2 C区と同様であるが、C区が西側くびれ部の調査であるのに対して本区は東側のくびれ部の調査で、後円部東側にまで発掘区が拡大され、東側墳蓋部の状況も明かにすることになる。

Eトレンチ $1 \times 3\text{ m}$ 前方部西側の墳蓋の確定と周溝の確認。

Fトレンチ $1 \times 4\text{ m}$ 前方部東側墳蓋の確定と周溝の確認。

Gトレンチ $1 \times 10\text{ m}$ 前方部と後円部の土層観察及び前方部の埋葬部有無の確認。

これらの各部の調査によって前方後円墳であるかどうか、築造当初の状況はどうであったかを把握することに力点をおいて調査を実施した。D区は当初 10m^2 内外の調査予定であったが、墳蓋線を追うなかで拡張を余儀なくされた。発掘面積は 69.5m^2 である。

6. 調査日誌

6月14日(土) 薄曇

午前10時から鍛入式が行われる。町側より鎌上教育委員長、峯田次長をはじめ社会教育係など8名出席。渡辺久内調査団長をはじめとして調査団員全員、土地所有者広谷長雄、東海林吉郎氏ら列席。

調査団の打合せの後、墳丘及び周辺の立木伐採と草刈りを行う。2つの墳丘(前方部と後円部)が椎木林の中に明瞭にその形をあらわす。

午後からAトレ、Bトレなどの発掘を行う。表土下すぐ地山(黄褐色砂質土)となる。

6月15日(日) 晴

くびれ部東側D区で墳蓋線を追う。地山の削り出しにより良好な状態で検出される。それと対称の位置にあるC区でも掘り下げて探ったが、明確な状態はつかめなかった。

前方部と後円部へ、 $1 \times 4\text{ m} \times 1 \times 2\text{ m}$ のトレンチを設定し掘り下げる。

6月16日(月) 晴後曇

O-5・6・7グリッド、R-T-10グリッドを調査し、周溝を検出。さらにくびれ部北側の



第12図 調査状況(1)

追求を行う。県文化課佐藤庄一埋蔵文化財係長の指導・来授があった。

6月17日(火) 雨

雨天のため作業中止。

6月18日(水) 曇後雨

R-10～T-10グリッドで周溝検出し精査を行う。J-10～J-11及びK-12・13グリッドにおいて墳丘部の精査を行う。同時にくびれ部北側を掘り下げ追求する。

6月19日(木) 曇後雨

午前中、Q-13・14グリッドの周溝を掘り下げ完掘する。O-16・17グリッドの排土と面整理を行う。

午後Q-17グリッドで 2×1 mの発掘区を設定し墳丘部及び周溝を追求する。又L-17～M17グリッドで墳丘の状況を観察する。O-13～17グリッドでくびれ部をたちわりするトレンチを設け掘り下げ、くびれ部北側の状況を調査する。

石鏡・石旗やフレークなどの石器・縄文土器片なども出土することから附近に縄文前期の集落跡があるらしい。降雨のため、午後4時作業終了。

6月20日(金) 雨後曇

午前中降雨のため作業中止。

午後発掘区遺構配置図を作成し、複雑な様相を呈するくびれ部附近の検討を行う。

6月21日(土) 曇後晴

午前くびれ部たちわりトレンチの掘り下げ及び面整理、前方部北側トレンチの拡張と周溝の精査、後円部南側墳丘の掘り下げと周溝の精査を行う。

午後ひきつき周溝の精査、くびれ部附近の面整理をする。後円部を全周する周溝を確認。

断面実測及び写真撮影を行う。明日の現地説明会資料の作成作業もあわせて行う。

米沢市教委より手塚幸・菊地政信調査員及び山形大学学生の来授があった。



第13図 調査状況(2)

6月22日(日) 晴

午前10時より現地説明会を開催する。柏倉亮吉県文化財保護審議委員長をはじめ町内外より約50名の参集があり、他にマスコミ関係者などの来館もあった。

午後実測及び写真撮影を行い、一部埋め戻し作業に入る。菊地政信及び山形大学学生来授。

6月23日(月) 曇後晴

埋め戻し作業及び実測などを行う。今次の調査は午前中で完了。午後より現場撤収を行う。

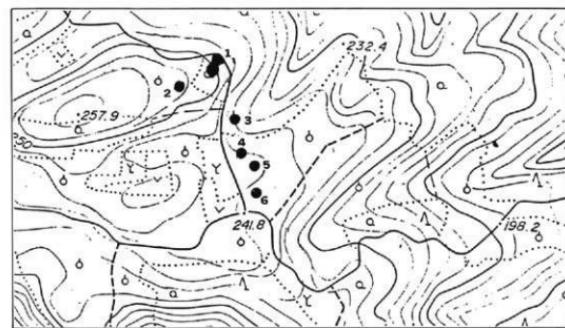
7. 調査の結果

(1) 周辺の古墳分布 (第9、14図)

壇の山にあった8基の円墳はすべて破壊されて墳丘の痕跡はほとんど残さないが、坊主塗においては、表面からも墳丘を確認できるものが数基ある。

坊主塗は山ふところにいだかれた東にひろく開かれた台地で、東西200m、南北150mほどである。標高240～260mで、20mほどのなだらかな起伏があり、西側がおおむね高い。

この台地は、果樹園や畠地になっているが、中央部北寄りの林道にそって1号墳がある。林道のため前方部先端がやや削りとられているが、東南と西北を主軸として雜木林に囲



第14図 坊主塗古墳群分布現況図

まれて存在する。(第10図) (第14図)

この台地の東端、東側へ向って傾斜する先端部に南北に並ぶ3基の墳丘を認めることができる。いずれも墳丘部は削平されているが、若干の高まりがある。1号墳の東側にやや明瞭に墳丘を残す円墳がある。直径約10mであり、内部主体は遺存している可能性がある。

さらに1号墳の南側のやや高さを増す畠地中にも1基の円墳がある。1号墳に加えて5基の円墳の所在をつきとめることができるが、それらは1基を除いてかなり削平されているもののわざかに墳丘の規模やその痕跡を推定することができ、10m前後の円墳であったと考えられる。これまでに石棺などの内部主体やそれに伴う遺物などが発見されなかつたのは、埋葬箇所がかなり深い部分にあるからであろう。

先に述べたように、1952年に武田泰造氏は22基を確認されているが、現状では6基のみ残存していることになる。1号墳を中心に分布がみられるが、内部主体が深い部分にあると推定されるから、墳丘は削平されても発掘調査によって確認できる可能性が大きい。

(2) 1号墳の墳形と規模 (第10図)

本古墳は南から北へ向って若干傾斜する箇所に築かれているため後円部に比べて前方部が高い。従ってそれぞれ別個の墳丘が並んでいるように見えなくもない。前方部は道路のためにその先端部が約2m削りとられ、その断面を露呈している。後円部は良好な状態で完全に残存している。(第10図)

その大きさの計測値については、斜面地に立地する上に、前方部先端が破壊されているので、正確な数値を得ることは難しい。計測値に若干の変更があることが予想されるが、現状から考えられる数値を述べよう。後円部南端と思われるAトレンチの周溝の立ち上る箇所から前方部先端の削りとられた部分を入れない箇所まで、つまり現状での主軸長は25.5mを測る。前方部先端の削りとられた部分が2m程度あったと思われるから、もともとは27.5mの主軸長ということになろう。さらに後円部は崩れて周溝の一部をおおっているから測り方によっては29mに達する。後円部径は、Bトレンチの墳籠線とD区の立ち上りの間が15.7m、現状で測れば17.7mである。前方部の長さは9.8mと推定される。前方部先端の長さ16~17mであったと考えられ、ほぼ後円部の径に等しい。くびれ部の幅はC区でやや不明瞭であるが、4.8~5.1mである。高さは後円部1.45m、前方高0.8m、後前の高差-0.65mである。斜面地に築造されているため後円部に比して前方部が著しく低い。水平面では、前方部は後円部墳頂より1.66mも低い。

後円部からの前方部主軸方向は、磁北に対して35度西へ偏っている。

平面的にみると、後円径と前方長の比率は、ほぼ6対4となる。また後円部径を6

とする前方部後長、前方部前長の比率は6:2:2とみられるが、前方部の中心点Pをどこに設定するか、また前方部先端がもともとどこまで伸びていたかによって6:3:2の計測間比率を求めることが可能であろう。

いずれにしても平面的には、前方部がくびれ部より大きく扇形に開く墳形で、墳丘長288mの大坂府堺市土師ニサンザイ古墳とは規模において比較することはできないが、前方部が著しく開く点は類似している。なお、墳丘長を8としたときのくびれ部幅と前方部先端幅は8:1.5:5で、土師ニサンザイ古墳(8:3:6)に比してくびれ部より前方部へ至る屈曲は著しい。また側面からみれば、傾斜面に築造されているために谷側の前方部は著しく低く、後円部墳頂より1.66mもの落差があり、その墳籠部が前方部の高さに等しいなど特異な墳形である。

張り出し部や、葺石、埴輪などは認められない。

(3) 発掘の所見

2つの独立した古墳が密接して存在するのか、それとも一連のもので前方後円墳になり得るかについてとくに重点的に調査を行った。

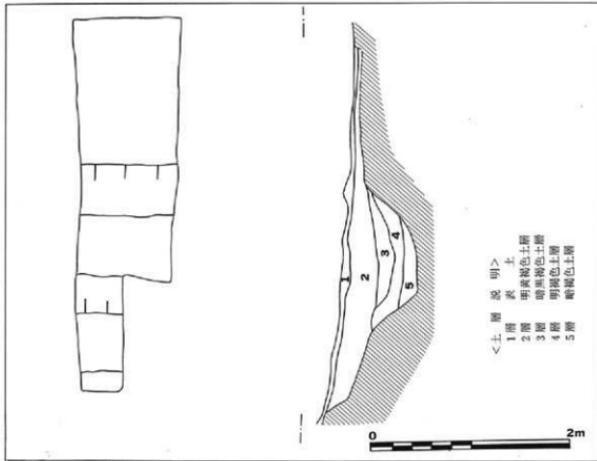
まず後円部をめぐる周溝と墳籠を確認するためにAトレンチを設定し発掘を行った。予想通り周溝はあらわれ幅1.85m、深さ80cm(基底部)である。溝の底部はU字型であるが、墳丘側は一度緩慢にスロープをえがいて急激に墳丘面へ持ち上っていく。(第15図)

この周溝はBトレンチでも確認され、後円部をめぐる周溝と把握されるが、周溝が墳丘へ向う持ち上りの状態はAトレンチでみるとよりもさらに著しく緩傾斜の整地層が幅1.3mにわたって墳籠をめぐり、直ちに周溝から墳丘が持ち上るのではなく、狭い周底帯のように周溝をめぐることが観察された。Bトレンチの溝はやや浅く、地表下35cmであった。(第16図)

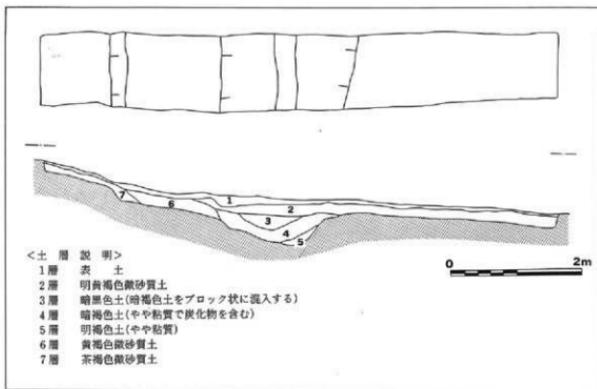
C区やD区のくびれ部においても、A・Bトレンチで確認された周溝がめぐり、前方部にのびる状態であるならば、前方後円墳であることは疑いのない事実となるのである。ところが予想に反して、C区のくびれ部附近で周溝は複雑な状態を呈していたのである。

C区においてくびれ部から前方部へ周溝はのびず、くびれ部の下を通って後円部をめぐる状態で、それはA・Bトレンチよりもかなり浅くなる。さらに前方部をめぐって弧線をえがく周溝もあらわれたのである。ここに至って本古墳を前方後円墳とする見解は再考を余儀なくされた。なお前方部からのがる2本の小さな溝はくびれ部にいたって消え、前方部をとりまく状態とはならない。(第17図)

ところがD区では、幅50cm、深さ50cmの周溝が東から南へ墳籠にそってめぐり、くびれ部



第15図 Aトレーンチ実測図

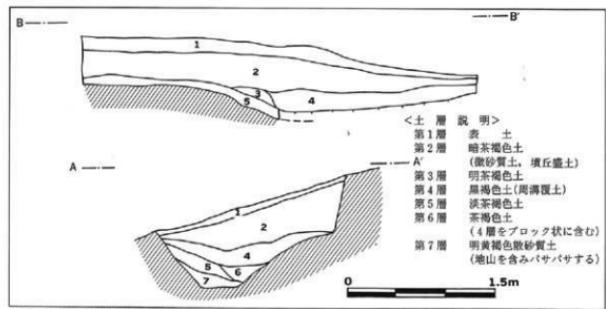


第16図 Bトレーンチ実測図

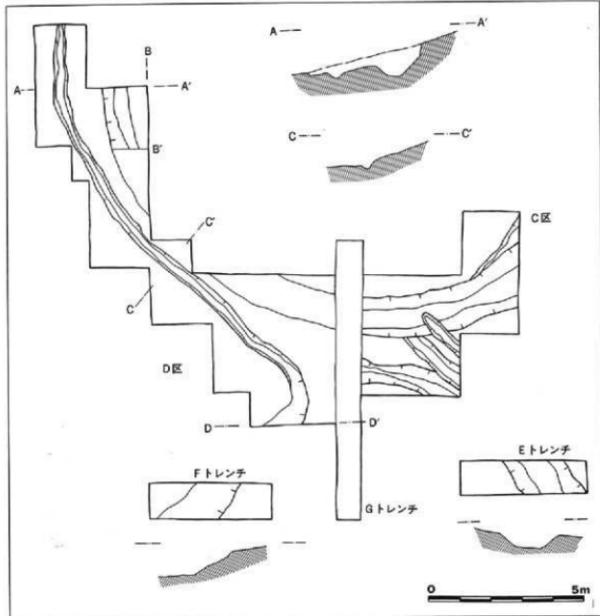
でみごとに屈曲して前方部に至るのである。前方部の墳麓線も後円部から前方部へくびれ部において屈曲して続くのである。C区では複雑で、後円丘をめぐるようにみえた周溝も、くびれ部の下で消えてしまうが、東側のD区においては本古墳が前方後円墳であることを如実に示す結果となったのである。(第18図)

さらにD区A-A' (第18図) の周溝及び墳麓部断面において観察されるように、幅50cmの後円部よりくびれ部をへて前方部へむかう溝から立ち上る墳麓線にそって発掘をすすめていく中で、墳麓の傾斜にそってもう一つの溝があらわれたのである。外側の溝より大きくなり幅1.8m、深さ60~80cm程度で、下部に位置する外側の溝より規模が大きい。したがってD区の所見では、外側に小さな溝、内側にやや大きな溝が二重にめぐっていたことが観察された。内側のやや大きな溝は、A・Bトレーンチ、C区で確認された円丘をめぐる周溝に対応するようである。そしてA・Bトレーンチでみられた内側のくぼみと緩斜面は、Dトレーンチの外側の小溝と対応するものとみられる。

以上の事実から、当初近接した箇所に2つの円墳が並んでいたものを、後に連結して前方後円墳につくり変えたものと考えるにいたったのである。すなわち、当初幅1.8mの周溝をめぐらした円墳があり、別にすぐ側に同じく周溝をめぐらしたやや規模な円墳との2つが密接して存在していた。この2つの円墳をつなぎ合わせ、その円墳に附随する周溝を埋めたてて、前方部にあたる円墳を削り出して形を整え、後円丘を1mほど東に移して前方後円墳に改変したと思われるのである。A・Bトレーンチの外側の1.8m幅の周溝、Dトレーンチ内側の周溝は旧円墳のものであり、第11図にみる右側にずれた円が旧円墳で、もう一つの円が前方後円墳の後円部墳麓線を示している。後円丘はやや東にずれるが、規模はほと



第17図 後円部北断面図



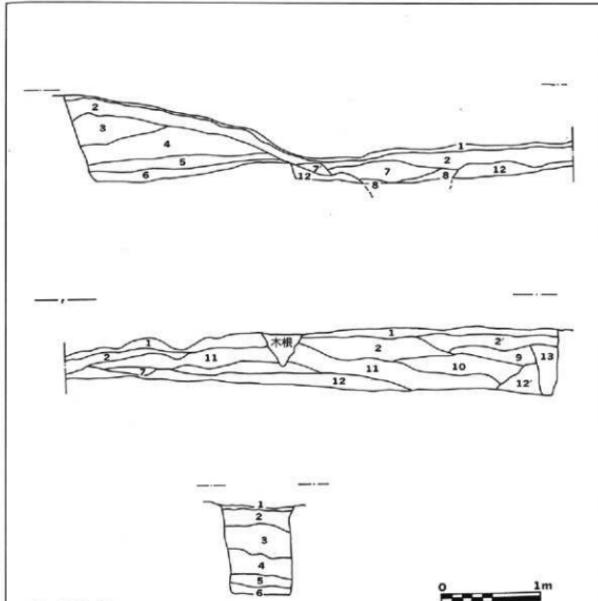
第18図 C区・D区・くびれ部・前方部実測図

んど変りない。

前方部にあった旧円墳の頂部へむかってGトレンチを設定したが(第19図)その奥部の土層に上から掘り込んだらしい状態が観察され、その下部から土師器の細片が出土した。

これは前方後円墳に変改される以前の旧円墳の内部主体の存在を示している。

埴丘の築成にあたっては、前方部、後円部ともに第12層の灰褐色粘質土を基盤とする層を整地し、その上から版築状に盛土を行っている。前方部はせいぜい50cm程度の盛土にすぎないが、後円部はGトレンチのセクションでみると、表土層から5層約1mに及ぶ。2つの墳丘ともやや高い自然地形を利用し、削り出し等によって一定の形を整えて後に盛土



<土層説明>

- 第1層 白土
- 第2層 緑褐色土 粘砂質でバサバサする
- 第2'層 2層に比べてやや粘土
- 第3層 暗灰褐色土 繼まっており微砂質でバサバサする
- 第4層 灰褐色土 第3層より繩まで堅い
- 第5層 泥灰褐色土 粘砂質で繩までいる
- 第6層 茶褐色土
- 第7層 灰褐色土
- 第7'層 7層よりやや明るい色調を呈す
- 第8層 黒褐色土 周溝覆土
- 第9層 黄褐色土
- 第10層 黄褐色粘質土
- 第11層 暗灰褐色土
- 第12層 灰褐色粘質土
- 第12'層 第12層よりやや粘質がよい
- 第13層 灰褐色土 第2'層からの掘りこみで微少な円筒を含み下位より土師器を検出

第19図 くびれ部断面図

を行ったことが明かである。

旧円墳は周溝を伴い、前方後円墳に改変されて後には、その墳麓部にそって小規模な浅い溝を有するのみで、西側では僅かなくぼみがあった程度であるが、崖面にのぞむ東側では後円部からくびれ部を経て前方部にのびる溝が明瞭に観察された。

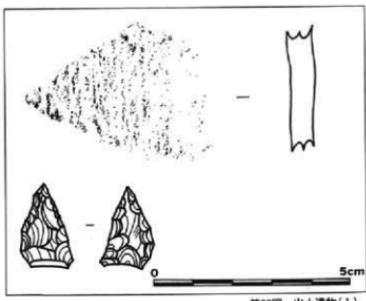
前方後円墳に改変された時に破壊されなかったならば、前方部に円墳であったときの内部主体、後円部に円墳のときと前方後円墳として改変された折の二時期の内部主体が存在することにならうが、前方部でそれらしい痕跡をかいま見ることができた。

(4) 出土遺物 (第20・20図)

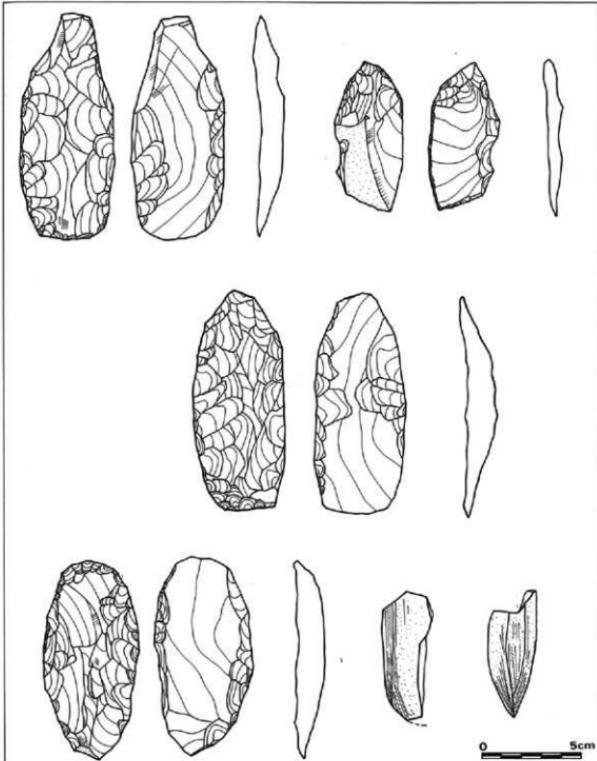
墳丘の盛土や周辺の覆土から縄文時代の遺物が出土し、Gトレンチ前方部より土師器破片が出土している。

縄文時代の遺物は、大型の石窓⁴⁵3点、二等辺三角形の石錐⁴⁶2点、磨製石斧の刃部1点、擂盤⁴⁷1点、前器⁴⁸1点、その他40点ほどの剥片が出土している。石斧を除くすべての石器が珪質頁岩製である。また縄文土器片2点が発見されており、うち1片は縦線の密接した撚糸文が施されている。石器とともに縄文前期の遺物で、それも比較的古い時期のものらしい。坊主窓は5~6,000年前人の人びとの生活の舞台でもあり、近くに住居跡もあったものと思われる。

この古墳に関連する遺物は、Gトレンチの第13層、前方部掘り込みの部分より出土した土師器の細片である。赤褐色を呈し、耳か壇の破片とみられるが、器形や時期を同定できるほどの資料ではない。古墳時代の遺物であることは確かである。



第20図 出土遺物(1)



第21図 出土遺物(2)

8.まとめと考察

坊主窪古墳群は、20数基より成る古墳群で、その中心をなす1号墳は前方後円墳である。墳長27.5mを測り、前方部がやや破壊されているが、保存状態は概ね良好である。後円部の径は17.7mで、後円部に対する前方部の比率は6対4となるが、くびれ部が狭く前方部が扁型に開き、前方部先端幅は後円部の大きさとほぼ同じである。

高さは、傾斜面に築成されているために、前方部が著しく低い。現地表から測れば、後円部墳頂で1.45m、前方部0.8mである。

もともと傾斜面の上下に二つあった円墳を接続し、一つの前方後円墳として改造成したきわめて稀な古墳であるということができる。発掘の状況からこのようない結論が導き出されたが、なお、検討の余地はあるといえるだろう。

円墳に対して後に方形壇状の施設を付した例は若干例ながら存在する。例えば、茨城県土浦市にある穴堀1号墳は、当初後円部を円墳として築き、その後に前方部を築成したものである。(1) また栃木県小山市の桑57号墳も円墳に葺石を置き、周囲を埴輪で飾ったあとに、そう間を開けず方形の造り出しが付けられたもので、造り出しの下部から円丘部の裾をめぐる円筒埴輪の一部が出土したという。(2)

埼玉県児玉町の長沖8号墳や千葉県成田市竜角寺101号墳も、前方部(あるいは方形の造り出し)の下部から円墳として築造された際の周溝の一部が検出されたので、当初の円墳に、後になって盛土による前方部が付設されたものであった。

しかし本古墳のように、近接して築造された2つの円墳をつなぎ合せて前方後円墳に改造成した例は寡聞ながらきわめて稀な例といわなければならない。

この場合には、円墳築造後にしばらく時をおいて何らかの事情が生じ、新たに前方後円墳に造り変えているのである。単にともとあった円墳を後につなぎ合せて前方後円墳として形を整えたか、それとも新たな被葬者を迎えるために前方後円墳をつくったのか、後者の可能性が強いと思われるが、内部主体の発掘調査をへない現在においては不明といふしかない。後者の場合には、二時期にわたる埋葬主体の痕跡が後円部より発見される可能性がある。

このような特殊な例が生じるには、當時どのようなドラマが起きたのか興味をそそられるのである。

次に本古墳の年代について考えてみたい。前方後円墳のなかでも小型に属すること、さらに前方部が極端に扁型に開くことなどから古墳時代後期であることは確かである。さらに年代をせばめて考えるとすれば、前方後円墳が消滅する7世紀以前であることは当然で、

6世紀後半の時期と推測される。つまりもっとも新しい時期の前方後円墳と考えられるのである。したがってその前に築造された円墳は、それ以前にあたり、直後に改造成されたとは考えがたいから、数10年あるいは1世紀さかのばる可能性があるといえるだろう。

[註]

(1) 国学院大学穴堀調査団「常陸穴堀」 1971。

(2) 大和久實平「桑57号墳発掘調査報告書」小山市教育委員会 1972。

9.結 言

坊主窪1号墳が前方後円墳であり、特異な築成法と墳形をもつ古墳であることが明らかになった。米沢盆地には、全長96mの南陽市稻荷森古墳をはじめとして、米沢市・南陽市・川西町などにおいて27基の前方後円(方)墳が分布している。

山形盆地においては、上山市金谷に所在する土矢倉2号墳が前方後円墳として知られている。全長17mで周溝を伴い、内部主体は箱式石棺で6世紀中葉の築造である。その他に山形市菅沢1号墳(全長32m)、同じく狐山古墳(全長28m)が前方後円墳ではないかといわれているがまだ確実ではない。それに坊主窪1号墳が加わり、山形盆地で現存するものは不確実なものを入れれば4基ということになる。

山形盆地では、その南端に位置する土矢倉2号墳が確実な前方後円墳分布の北限として把握されていた。ところがこの度の発見と調査によって17km北上し、山形盆地の中部に及ぶことになる。これは日本海側の前方後円墳の北限でもある。太平洋側では岩手県胆沢町の角塙古墳が今のところ最北に位置する前方後円墳である。古墳時代後期に山形盆地中部まで前方後円墳の築造が行われることは、畿内古墳との関連をはじめ、空白の東北古代史を考える上でも学術的にきわめて重要である。各地で前方後円墳の終末が古墳時代研究の一つの課題となっているとき、今次の調査の成果は貴重である。

なお残された課題は多いが、内部主体の調査は別にしても、全面にわたって墳範線を追求し、墳形についてのより詳細なデータを得ること、改変の様相を詳しく把握し、とくに前方部の形態や埋葬状況を追求すること、また周辺部に分布する古墳の状況を知ることなど、当面できるだけ早い機会に本調査が実施されるように望まれる。

とりあえずこの古墳の重要性にかんがみ、充分な保護対策が必要とされるのである。



1. 調査前の坊主塗1号墳(1)北西道路側より



2. 調査前の坊主塗1号墳(2)後円部



3. 後円部 西側より



4. 後円部 北西側より



5. 前方部先端



6. C区・後円部北側をとりまく周溝



7. Aトレンチ・周溝



8. Aトレンチ・周溝断面



9. C区・くびれ部



11. D区・埴籠部



10. C区・周溝断面



12. D区・後円部からくびれ部へづく埴籠線



13. Gトレンチ・前方部から後円部へ



14. 後円部の断面（Gトレンチ）

山辺町埋蔵文化財調査報告書第2集

坊主窪1号墳 予備調査報告書

平成元年3月25日 印刷
平成元年3月31日 発行

発行 山形県東村山郡山辺町大字山辺1
山 辺 町 教 育 委 員 会
印刷 藤 庄 印 刷 株 式 会 社
